

小島省齋〈こじましようさい〉の竹西亭〈ちくせいいてい〉（青垣町）

佐治の旧役場の西に、古い木がこんもりとしげり、その中に杉垣をめぐるした小さな家があります。

これが小島省齋の講堂、竹西亭であります。

小島省齋は文化元年（約百六十五年前）佐治の中町で生まれ、幼名を忠太とって、煙草〈たばこ〉をきざんだり、売ったりして家の手助けをしていました。

「この子はおそろしく賢〈かしこ〉い子や。」

近所の評判になっていました。

四才も終わり頃になると筆をもって人の字をまねして書き出しました。

寺へ手習にかようようになったのは七才の時でした。

「おい、忠太、もうかえろうか。」

「いや。」

「かえらんかい、忠太のあほたれ。」

こう言って墨〈すみ〉をびゆっと顔にかけるとをじとこらえて勉強を続けました。

父の忠太郎は遠くへ行商〈ぎょうしょう〉にいて家に帰ってきません。その上、兄までも死んでしまいました。

家はびんぼうになるばかりでした。

母の手伝いで煙草をきざみながら、孔子〈こうし〉などの本を読むのでした。

「お母さん、遊学〈ゆうがく〉をさしてください、一生〈いっしょう〉の願〈ねが〉いです。」

彼一人をたよりに生きてきた母はきつとなげき悲しむにちがいないと思ったのに、

「忠太や、お母さんにも頼みがある、どんなことがあっても志〈こころざし〉を屈〈ま〉げるのじゃないよ。」

母のまごころを背おって京都へ旅立ちました。

苦節〈くせつ〉三年、月日は矢の如〈ごと〉く流れ、学問を修め、一流の学者となって帰郷〈ききょう〉しました。

漢〈かん〉学者省齋の帰郷を知った村人たちは先を争って竹西亭に教えを乞〈こ〉いに集まりました。

私塾〈しじゅく〉竹西亭で塾弁〈ねつべん〉をふるいました。

藩主織田候の耳に入り、織田候への進講〈しんこう〉を命ぜられました。

柏原藩主は事毎に諮問〈しもん〉され、省齋の説を用いて崇広館〈そうこうかん〉がもうけられました。

或日、織田信親候が佐治に巡視〈じゅんし〉した時、省齋の家を訪問しました。

省齋の家へ着いた信親候はつかつかと家に入り、下座〈しもざ〉に座って、

「先生、母上は御元気ですか。」

師の礼をとった殿様の訪問に省齋母子は感泣しました。

明治十七年、八十一才で没し、菩提寺〈ぼだいじ〉妙法寺にまつられました。

